団体名：**長野県教育委員会**

研究概要

長野県教育委員会では、平成30年度～令和２年度に、県内すべての子供たちが自分らしく学ぶことのできる授業づくり、学級づくりの共通基盤となる内容を「**信州型ユニバーサルデザイン**」として、現場の教員と共に構築した。この「**信州型ユニバーサルデザイン**」では、研修動画も作成し、各校が校内研修で、子供の多様な学び方や合理的配慮等についても知見を深められるようにした。

しかしながら、学校現場では、特別な支援が必要な子供が増える中、どのように対応すればよいのか苦慮している学校が多い状況である。そのため、**特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たち**が互いに尊重される授業や、多様性を包摂する学校教育の在り方について知見を深めていく必要がある。

そこで、認知や発達等に特性があり、学びづらさを抱える児童生徒に対し、**特性を包み込む授業の在り方**や、**個々の特性を把握するアセスメント方法**、**特性に応じた教育方法**について研究を進め、長野県教育委員会がすでに作成している「適切な学びの場」ガイドラインの改訂や、アセスメントツールの活用と支援方法を整理した新たなガイドラインの作成を進め、誰一人取り残されず、自分らしく学ぶための支援につなげる。加えて、一般社団法人 Education Beyondと協力し、「アドバンス・ラーナー向けのサマースクール（仮）」を開催したり、STEAM教育分野と連携する信州大学ジュニアドクター育成塾（令和５年で５期生）と共同したりして、子供たちを支援する。

令和５年度の取組

- **達成目標**の設定
- 長野県における授業の現状と分析
- 仮説の設定
  「自らの学習を調整する力」
  「学びに満足する姿」
  「認知発達に特性がありそうな児童生徒の姿」を**見える化**していく
- アセスメントに着目した授業改善
- 授業改善に必要な教師のマインドセット
  「小さなグラデーション変化が大きなマインドチェンジへ」
- 授業改善が進んだ**「包み込む授業」**のイメージ作成
- 学校外での学びの場の創造
- **アドバンス・ラーナー向けスクール**の実施

令和６年度の取組

- 特異な才能がある児童生徒の授業での把握と**有効な支援の模索**
- 教師が把握するアセスメントから、**児童生徒自身が自らを理解するためのアセスメント**の実証研究
- 学校外の学びの場として、アドバンス・ラーナー向けスクールの実施とその理解の普及と**他事業との連携充実**

1年次の達成目標の作成

研究校同士の定期ミーティングや有識者による指導・助言を踏まえ、各教育事務所と連携し支援

「学びの充実」WG

信州型UDの更なる研修

アセスメントツール利用

「全てを包み込む」授業デザインの研究

深まり

第一層

第二層

第三層

1年次到達目標達成

アセスメントに基づいた通級指導教室の充実

アセスメントツールを有効に活用できる指導体制

「アセス実証」WG

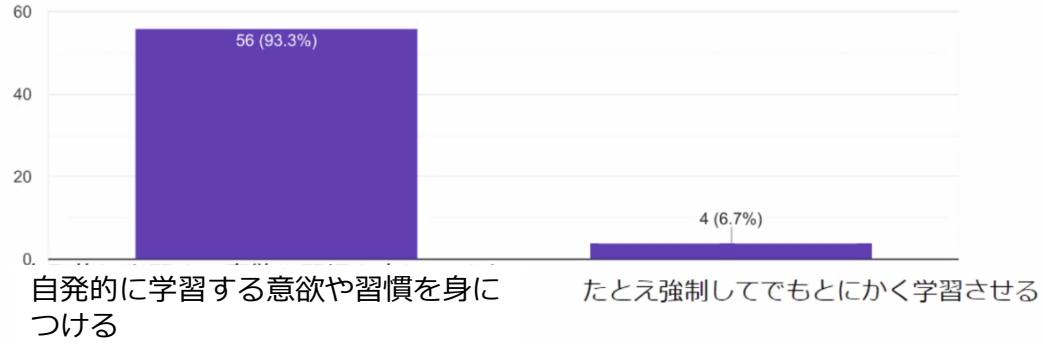
「授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間になっていた」
【児童生徒の割合】 81.1%(R4)より上昇

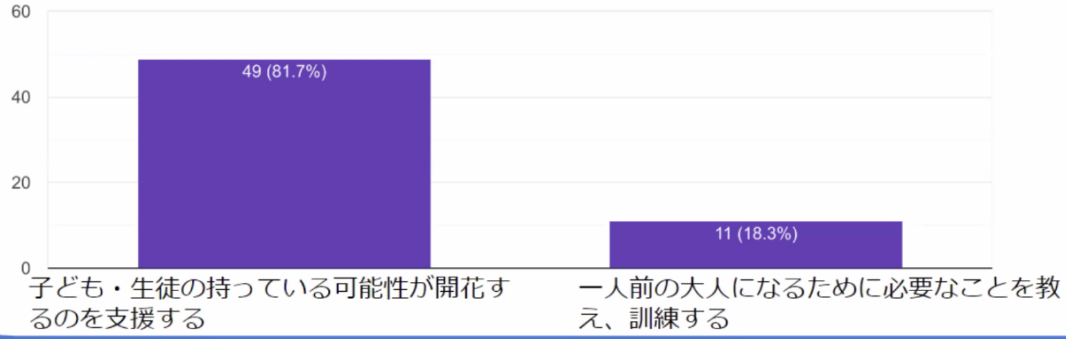
第一層：全ての子どもを対象に質の高い指導を実施　第二層：少人数での補足的な支援
第三層：個別的な支援　【参考】LITALICOジュニア

先生方へ深堀り ＜学びの充実研究校＞

指導観について

あなたは、授業や生活指導・生徒指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。
あなたがあえていえば重視していると思うほうの番号を選んでください。



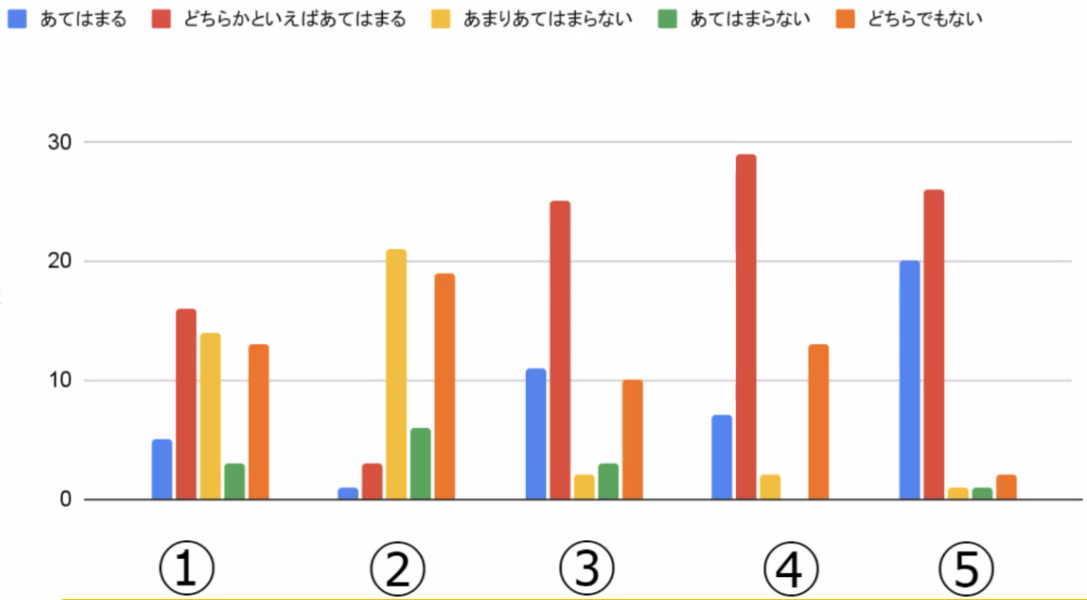


・自発的に学習する意欲や習慣を身に付けること
・児童生徒の持っている可能性が開花すること
　への支援に意識

先生方へ深堀り ＜学びの充実研究校＞

教科指導について

教科指導についてお教えください。



①授業の中で、児童生徒が学習方法や学習内容を自由に選択する場面が設けられている
②授業時間中、教員が説明する時間が７割を超えている
③テストやノート等提出物の他にも、評価の視点を設けている
④多様な児童生徒が参加できるような工夫をしている
⑤勉強が苦手な児童生徒に対して、努力以外の要因について考えることがある

・多様な児童生徒が参加できる授業の工夫
・勉強が苦手な児童生徒の努力以外の要因
に目は向いているが、
「児童生徒が学習内容、学習方法を自由に選択する」
という場面は少ない。

先生方へ深堀り まとめ ＜学びの充実研究校＞

「人と協力しながら、ものごとを進める力」
「自分の考えをわかりやすく話す力」
などを重視している。
加えて、単に知識・技能の習得のみではなく
「子どもたちが主体的に学ぶ」
ことを目指して、
「教員が説明する時間を少なくするように」
努力している様子が伺える。

学びの充実研究校 6校調査結果

先生方へ深堀り まとめ ＜学びの充実研究校＞

具体的には、
・自発的に学習する意欲や習慣を身に付けること
・児童生徒の持っている可能性が開花すること
への支援に意識があり、
・多様な児童生徒が参加できる授業の工夫
・勉強が苦手な児童生徒の努力以外の要因
に目は向いているが、
「児童生徒が学習内容、学習方法を自由に選択する」
という場面は少ない。

学びの充実研究校 6校調査結果

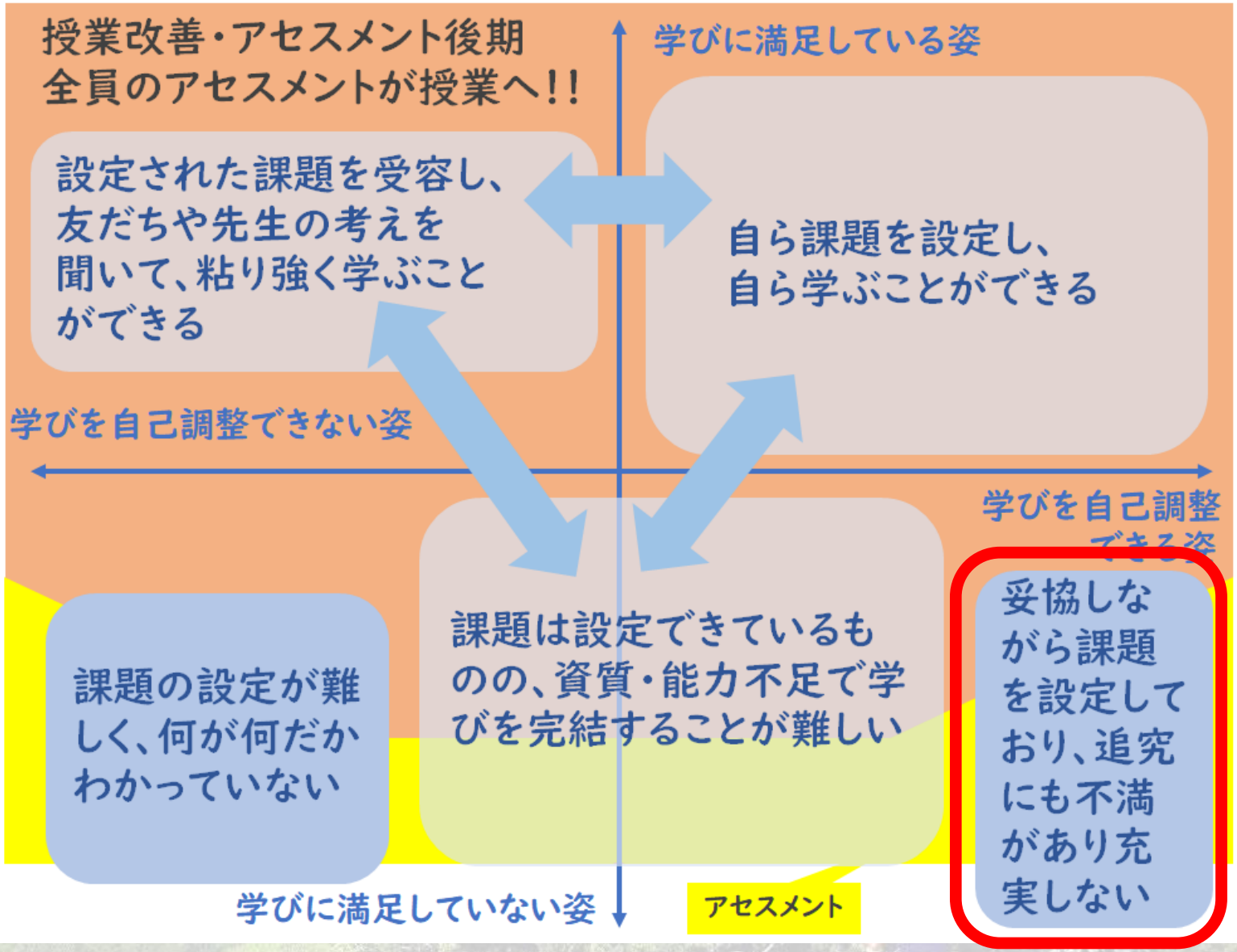
先生方へ深堀り まとめ ＜学びの充実研究校＞

そこで、
多様な児童生徒が存在する学級の中で、
「児童生徒が学習内容、学習方法を自由に選択する」
授業デザインを構築するために、

- 自ら学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど**自らの学習を調整する姿**
- 知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を身に付け、**学びに満足する姿**
- **認知発達に特性**がありそうな児童生徒の姿

を**見える化**できるよう**仮説**にまとめた。

学校外の学びの場の必要性



信州型UDをUP DATE（ユニバーサルデザイン）

認知や発達の特性に応じた学び Start UP リーフレット

長野県教育委員会では、全ての子どもに特性があるという認識のもと、信州型ＵＤを活用し、全ての子どもが自分らしく学ぶことができる授業づくり、学級づくりを推進してきました。この取組の更なる充実を図り、一人の子どもも取り残されない「多様性を包み込む」学びの環境をつくるために、「認知や発達の特性」に焦点をあて、令和５年度より２年間の実証研究を進めています。

実証研修１年目の取組として、学びの改革パイオニア校の実践と有識者の皆様との議論を基に、子どもたち一人ひとりが他の誰でもない自分の個性や可能性を認識し、多様な他者を尊重できる「学校・学級づくり」のヒントになるよう、このリーフレットを作成しました。

「静かに座って授業に参加しているけど、伸び悩んでいる」
「教科によって取組に大きな差があり、継続的な活動になりにくい」
「同世代の子どもとは興味の対象レベルが異なり、一斉一律の授業では、学びが深まらない子どもが増えてきている。」

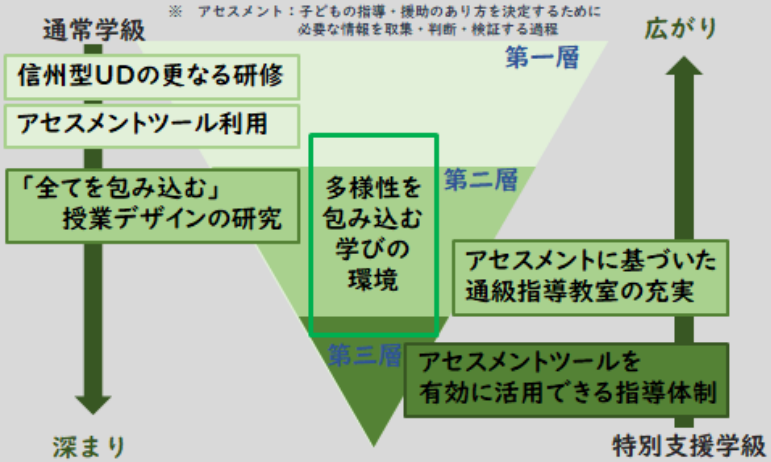
などの悩みを踏まえ、これからの子どもたちへの支援を考えるきっかけにぜひ御活用ください。

はじめに

多様性を包み込む学びの環境をイメージしてみましょう

下図の大きな▽は、全ての児童生徒を表しています　【参考】LITALICOジュニア
第一層：通常学級での質の高い指導を実施　第二層：通級指導教室等での少人数での補足的な支援
第三層：特別支援学級等での個別的な支援

※　アセスメント：子どもの指導・援助のあり方を決定するために必要な情報を取集・判断・検証する過程



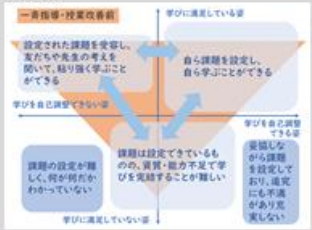
長野県教育委員会学びの改革支援課・特別支援教育課

今後は・・・

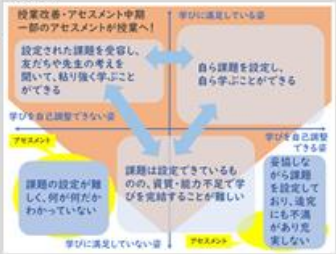
授業改善が進み、多様性を包み込む授業をイメージしてみましょう

図１の▽は、一斉指導の限界と言われている約70%の子どもたちを表しているのですね。

【図１】

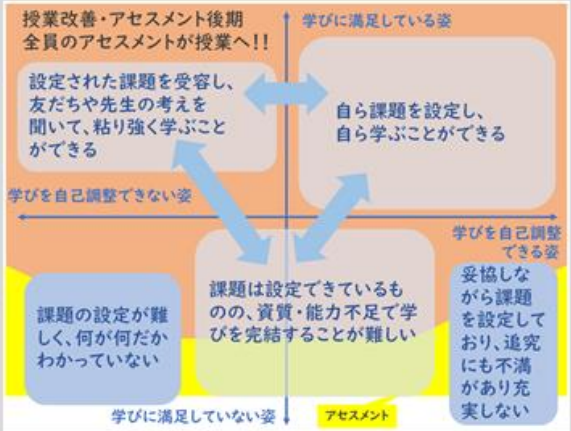


【図２】



▽に入らない子どもは、左下や右下にいるとすれば、支援の方法や対応も変わってくるかも。

【図３】



授業改善と様々なアセスメントを組合せて、図２を経て図3のような「多様性を包み込む」授業をつくっていくというイメージだな。

子どもたちの「学びへの満足感」「学びを自己調整する資質・能力の育成」が重要であり、デジタル教科書など文字以外の情報の有効活用と合わせて、今後も実証研究を進めていきます。

合わせて、アセスメントについても「目的」と「手段」を整理し、より有効な活用につながるよう事例等を収集し、全ての子どもにとっての「多様性を包み込む」学びの環境づくりを進め、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実につなげます。

それにより、授業が知識やスキルの習得に偏ったものから、探究し続ける中で、知識やスキルを獲得し、他者と協働しながら学べるものとなり、全ての子どもが「認知や発達の特性」に応じて、自分らしく学べるものに変化していくと考えます。

協力有識者
・常葉大学教育学部　教授　笹森洋樹　氏　・大阪市立大空小学校　初代校長　木村泰子　氏
・株式会社SPACE　CEO　福本理恵　氏　・信州大学医学部　教授　本田秀夫　氏
・信州大学教育学部　教授　島橋知香　氏　・信州大学教育学部　准教授　佐藤和紀　氏

学びの改革パイオニア校
・佐久市立中込小学校　・佐久市立高瀬小学校　・伊那市立東部中学校
・塩尻市立桔梗小学校　・長野市立山王小学校

アセス実証校
・松本市立開成中学校　・長野市立鍋屋田小学校

このリーフレットの情報を含む、研究の最新情報はこちらから発信しています
https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyogaku/kyoshokuin/shiryo/ninchihattatu.html

～全ての小・中学校が「多様性を包み込む学びの場」となるために～

キーワード：「静かに支援を必要としている子はいませんか？」

「はじめに」で示した「多様性を包み込む学びの環境」をすべての小中学校で実現するためには、まず、通常の学級（第１層）に在籍する「多様な子ども」の実態を把握することが重要です。
文部科学省から委託を受け実施する本実践研究の１年目（R５年度）には、通常の学級において、「静かに支援を必要としている子」に着目しました。

「静かに支援を必要としている子」に気づき支援につなげるためフロー

気づき　担任による気づきとアセスメントツールによる気づき

「静かに支援を必要としている子」に気づくのは担任の役割です。「集中力が続かない」「やる気が乏しい」「読み書きが苦手」「登校渋り」など、担任の感覚や経験による気づきとともに、集団を対象としたアセスメントツールを活用し客観的にその子の実態を把握していくことも重要です。
また、教科担任や特別支援教育支援員等関係する職員の気づきも大切にしましょう。

何に困っているかの検討　担任と特別支援教育コーディネーターの連携

担任は「静かに支援を必要としている子」に気づいたら、特別支援教育コーディネーター（特 CO）に相談しましょう。担任と特 CO の連携により、その子が何に困っているのかを把握します。その際、個人を対象とした詳細なアセスメントツールを活用し客観的にその子の実態を把握しましょう。

支援の検討　校内教育支援委員会の機能発揮

担任と特 CO によるアセスメント結果を、校内教育支援委員会で共有し、支援の検討をしましょう。
学年会・教科会などその子にかかわる全職員がその子を理解し、支援にあたることができる体制を整えておくことが大切です。
支援の検討の際、通級指導教室担当者や特別支援学校のセンター的機能の活用等外部機関からの助言をえることも有効です。

支援の実施　チームによる支援・通級指導教室との連携

「支援の検討」の際に確認された支援体制により支援を実施します。
T.T.による支援を行う際には、座席表に支援のポイントを記述しておく等、支援を行う職員と支援方法を共有し、役割分担を明確にしておきます。個別の指導と「その子に応じた、集団への参加につながる学習」も大切にします。また、通級指導教室担当者の助言を得ながら、その子に合った学び方を生かすための配慮も必要です。

＜学級・授業づくりのポイント＞
～実証研究協力有識者からのメッセージ～
子どもが困っていることを安心して発信できる、自分が他の子と違うツールを使って学ぶことに安心できる学級であることが前提です。
授業づくりでは次のような工夫もしましょう。
◆「静かに支援を必要としている子」がいることを前提に、全ての子が興味を持てる題材の選択・工夫
◆ 子どもが選択する場面を多く設ける
◆ 興味が共通する子ども同士でのグルーピング　等

【集団を対象としたアセスメントツールの例】
◆多層指導モデル MIM（Gakken）
⇒読みの基礎となる特殊音節のアセスメントと指導
◆たつじんテスト（内田洋行）
⇒ことばと数の分野のつまずきを明らかにするためのテスト
◆学級集団アセスメント（生徒指導アンケート等）
（民間企業のもの、市町村や学校独自のもの）

【個人を対象としたアセスメントツールの例】
◆実態把握のためのチェックシート
（長野県教育委員会）
※各種ハンドブック内に掲載
◆「吃音、チック症、読み書き障害、不器用の特性にきづく『チェックリスト活用マニュアル』」
（厚生労働省）
◆LITALICO 教育ソフト
⇒「感覚・運動面の困り」「学習面の困り」「行動面の困り」「スキルの習得状況」のアセスメントが可能

【支援の検討に役立つ情報】
◆合理的配慮実践事例集
（長野県教育委員会）
⇒ワンポイント配慮例を掲載
◆小中学校学習指導要領解説（文部科学省）
⇒「障害のある児童への配慮についての事項」に支援の工夫を掲載
＜小学校＞　＜中学校＞
◆インクル DB
（国立特別支援教育総合研究所）
⇒合理的配慮の事例を掲載
◇特別支援学校のセンター的機能の活用

【通常の学級の授業づくりの参考となる情報】
◆特別支援教育支援員が活きる校内連携のしおり
（長野県教育委員会）
◆信州型ユニバーサルデザイン研修シリーズ
（長野県教育委員会）
◆小学校・中学校通常の学級の先生のための手引書 通級による指導を通常の学級での指導に生かす
（国立特別支援教育総合研究所）

R5 年度における「研究校での取組状況」

気づき　担任による気づきとアセスメントツールによる気づき

支援を必要とする子は担任による気づきが大切ですが、学級集団アセスメント（比較的簡使な生徒指導アンケート）を行うことで、担任による気づきだけに頼らない把握を試みました。その結果、全校200名程の子のうち40名程が、何らかの配慮が必要である可能性が示されました。その内4名は、これまで 通級指導教室や特別支援学級での支援や集団の中で、何らかの支援が必要であるとされていない（気づかれていない）子でした。
＜ポイント＞ 担任による気づきをベースとしつつ、簡便なアセスメントを広く実施することで、「静かに支援を必要としている子」を把握。

何に困っているかの検討　担任と特別支援教育コーディネーターの連携

上記の個別支援が必要な（可能性がある）4名について、特 CO が担任へ聞き取りを行うとともに、教室で行動観察を行いました。また担任とともに、実態把握のためのチェックリストや LITALICO 教育ソフト等のアセスメントツールを用い、詳細なアセスメントを実施し、困りごとについて客観的に把握しました。その結果、4名のうち2名は、個別の支援が必要であることが分かりました。
＜ポイント＞ 支援が必要な可能性のある子について、更に丁寧に特性・課題等を確認。個別の指導計画を作成すべき子などの特定。

計算が苦手なＡさん
聞くことが苦手なＢさん

○ 担任と特 CO が LITALICO 教育ソフトによるアセスメント ⇒「計算する」の項目で困難さ。
⇒ 特 CO が、相談・支援を行うと、A さんは「2ケタでわるわり算の筆算が苦手」と分かる。
⇒ 特 CO がさらに詳しく観察すると、「2ケタでわるわり算の筆算」は手順が多く、順を追って計算していくことにつまずいていることが分かる。
○ 特 CO が授業で行動観察 ⇒担任の指示や説明を聞き取れていないと分かる。
⇒ 担任と特 CO で、LITALICO 教育ソフトによるアセスメント。
⇒ 「集中することが苦手」、「ケアレスミスが多い」、「人の話を聞き逃すことが多い」の項目にチェックが入った B さんは、注意・集中が苦手であるため担任の指示や説明を聞き逃していることが分かる。

支援の検討　校内教育支援委員会の機能発揮

個別支援が必要と判断された２名について、担任と特 CO からの 情報をもとに、校内教育支援委員会で「誰が」、「どのように」支援できるか、校内資源と照らし合わせ検討しました。通級指導教室担当者からの助言も参考に、2名のつまずきについて、次のように支援を行うこととしました。
＜ポイント＞ その子に係る全職員で特性を共通理解し支援を検討。通級指導教室担当者や外部機関からの助言も有効。

計算が苦手なＡさん
聞くことが苦手なＢさん

○ 担任が計算の手順を黒板に提示、A さんの手元に手順表を置き、自ら手順を確認し計算できるようにする。
⇒ 手順表をヒントに自力で計算できるようになるまでは、特別支援教育支援員等、支援が可能な職員がそばにいて、手順通りに進んでいるかをその場で確認。必要な場合には声掛けを実施。
○ 座席は周囲の刺激が少なく集中しやすい位置へ。担任の指示・説明時は、「これから話すことは大切なことです」と全体に注意を促し、B さんが担任に注目できているかを確認。注目できていない場合は、全体への指示や説明の後、個別に伝える。特別支援教育支援員等、支援が可能な職員が担任の指示や説明通りに学習を進められているか確認し、修正が必要な場合には声掛けを実施。

支援の実施　チームによる支援・通級指導教室との連携

計算が苦手なＡさん
聞くことが苦手なＢさん

○「2ケタでわるわり算の筆算」では、特別支援教育支援員が手順表を使い計算する方法を伝える事から開始。
⇒ 手順表があることで、粘り強く計算できるようになる。（特別支援教育支援員等が個別に支援する時間も減）
○ 担任は、B さんが集中しやすいように、教室前面や黒板の周囲の環境を整え、座席を担任の近くに移動。
⇒ 担任の指示・説明時、注目を促したり、個別に伝えたりする、特別支援教育支援員等が、学習の進捗状況を確認し必要に応じて声をかけることで、注意・集中が継続。
⇒ 「課題が何かもわかっていない」状態であったが、やるべきことがわかるようになり、自ら学習に取組む姿。

＜ポイント＞ 担任だけに任せないチームによる支援。一定期間の支援実施後、支援の見返しと次の支援の検討も必要。

研究実践校では、同じ支援を一定期間継続したのち、校内支援委員会で情報を共有し、支援の効果を検証しました。上記 A さんと B さんにとって必要な支援が実施されたことで、「設定された課題を受容し、友達や先生の考えを聞いて、粘り強く学ぶことができる」ようになりました。
支援方法の検討時、通級指導教室担当者を交えて A さんと B さんの困難さに合わせた支援内容を検討し実施すると同時に、担任が信州型 UD のポイントを生かして学習環境を整えたことも有効な手立てとなりました。
そして、再度、学級集団アセスメントを行うと、2名とも学習意欲の高まりがみられました。

一般社団法人
EDUCATION BEYOND

自由研究プログラムin長野開催！
～2023 夏休み編～

主催：一般社団法人Education Beyond　共催：長野県・長野県教育委員会

学校の授業を超えて学びたい。もっと好奇心を満たしたい。そんな小学生へ。

アドバンス・ラーナーの小学生を対象に、「自由研究プログラム in 長野～2023夏休み編～」をこの夏、長野県にて開催します。
東京で2022～23年の年末年始に実施した「自由研究プログラム～2023冬休み編～」、さらに今年5～6月に開いた「自由研究プログラム～2023春～」が好評だったことを受け、初めて東京を飛び出し地域での開催となります。アドバンス・ラーナーは、およそ1か月かけて深めていきたい「問い」を立てます。この「問い」を深めるため、子どもたちには大学生や社会人などのチューター陣が伴走します。
各専門分野の知識や経験が豊富なチューターの面々が、子どもたちの知的欲求に応えていくプログラムです。

7月29日(土) 10時00分～16時30分	7月30日(日)～8月18日(金)の期間	8月19日(土) 10時00分～16時30分
テーマの決定	子どもとチューターで個別にオンラインでのミーティングを重ね、研究内容を深堀りする	自由研究最終発表

応募概要
- ●対象：小学4年～6年生　●分野：数学/物理/宇宙/化学/生物/プログラミング/哲学など
- ●場所：長野県長野市　●募集人数：32名程度　●30,000円/人（長野県在住の場合は5,000円/人）
- ※これら概要については、状況によって変更する可能性があります。詳しくは、当団体までお問い合わせください。

【募集概要】【登録・応募】はQRからご覧ください。メールでも気軽にお問い合わせ下さい。

enroll@education-beyond.org

EDUCATION BEYOND

冬休み特別プログラム
BEYOND SCHOOL in 長野 2023

もっと好奇心を満たしたい君へ
これまでの自分を超える場所

特定の分野に興味がある！深掘りしたいテーマがある！
そんな知的好奇心が旺盛なアドバンス・ラーナーの小学生に向け、
各専門分野の知識を持つチューターが研究をサポート。
君の興味関心、どこまでも深掘りしよう！

応募締切
11/17(金)

キックオフ
対面
12/17(日)
12:00-17:00 頃
自分のテーマを決めよう！

研究期間
週2回程度オンライン
12/18-1/13
チューターと個別ミーティング
研究内容を深掘り！

最終発表会
対面
1/14(日)
12:00-17:00 頃
お互いの研究成果を披露しよう！

過去の研究テーマ例
- ヤモリのくっつき方は？
- AIを自分で作りたい！
- 納豆菌の正体は？
- 生きる意味とは？
- ミサイルの歴史と軌道計算

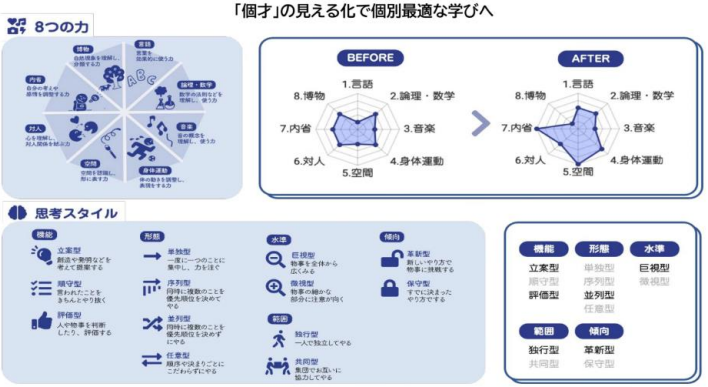
対象：小学 4～6 年生
分野：数学、物理、宇宙、化学、生物、プログラミング、哲学など
場所：長野県長野市内
募集人数：16名程度
費用：長野県在住の場合は 5,000 円／人（長野県外の方は 30,000 円）
主催：一般社団法人 Education Beyond
共催：長野県、長野県教育委員会

「アドバンス・ラーナー」ってどんな子？
知能が高く学びの習熟が早い子や、好奇心が極めて強い子のこと。「ギフテッド」とも呼ばれる。

#個才 #個別最適 #認知特性

SPACE 個々を生かす「個才」のアセスメント

「個才」の見える化で個別最適な学びへ



@2023 SPACE INC

1. 実施概要（アセスメントと自分学の位置付け）

SPACE

アセスメントにより「個才」を把握
学び方のクセを知ることによる学習の個性化

自分学により「自己理解」を深める
価値観や興味関心を見つめて学習の個性化

1. 実施概要（生徒への実施内容）

SPACE

2 アセスメントの実施

認知特性や興味関心領域を把握するアセスメントを実施することで、個々の才能や自分の学び方のクセを見える化して捉えやすくする

3 自分学講座の実施

自分を捉えるフレームとして「自分学」講座を実施し、自分自身の特性だけでなく、大切にしたい価値観や将来こうなりたいという自己像とビジョンを明確化する